

野球解説者・評論家

小宮山 悟氏に聞く

聞き手 宮田 英里●フリーアナウンサー

宮田 本日は、十九年間にわたり、プロ野球の投手として活躍された小宮山悟さんにお話をお聞きます。ルーキーイヤーの一九九〇年から、現役を退く二〇〇九年までに積み重ねた勝利数は百十七。一九九七年には最優秀防御率のタイトルを獲得されたほか、二〇〇二年には海を渡り、メジャーリーガーとしても活躍されました。

プロ野球選手といえは、「大人になったらなりたい職業」で、野球少年のほとんどが夢見るあこがれの職業です。小宮山さんもやはり子どものころの夢は、プロ野球選手だったのでしょうか。

小宮山 僕らの少年時代は、野球選手を目指すことが当たり前の時代だったんです。Ｊリーグも発足していませんから、プロサッカー選手というカテゴリーも存在していませんでした。

毎日野球をやって、家に帰れば、野球好きの親とテレビ機數でジャイアンツのナイター観戦。それが日常でしたから、自然とプロ野球選手を夢見るようになりました。ただし、そこに深い意味があったわけではありません。単なる子どものたわ言。小

学校の卒業文集の「将来の夢」の欄に、女子のほとんどが「ケーキ屋さん」や「お花屋さん」、男子の八割は「プロ野球選手」と書く時代でしたから。その意味では、ごくごく普通の小学生だったと思います。

**親の教育方針に影響を受けた少年時代
夢見がちにならず、足元を見て暮らす**

宮田 子どもながらに夢を夢で終わらせたくないという強い信念がどこかにあって地道な努力を積み重ねてこられたのでしょうか。

小宮山 実のところ、夢を現実にしたいたとは思っていませんでした。小学校を卒業し、中学生になると、世の中のことも少しずつ理解できるようになってきますよね。当然、プロ野球選手になることは、とても難しいことだとわかってくる。僕の場合は、その途端、夢見がちなことば考えないようになりました。

これは育ってきた環境も関係すると思います。親には「浮ついたことは口にするな。きちんと足元を見て暮らしていかなければいけない」とつねづね言われていましたか



小宮山悟氏(右)と宮田さん(2012年8月2日 ㈱RAM SPORTSにて)

ら、その影響を濃く受けた結果でしょう。

宮田 子どもの「なりたい」をかなえてあげるために背中を押すのではなく、さらに深く子どもの幸せを考え、現実を見ることの大切さを教えられたのですね。

小宮山 そのためか、「将来はまっとうな仕事に就きたいな」と考えるような中学生でしたよ(笑)。しかし、そうした考えは、学校の先生には理解してもらえませんでした。中学校の三者面談で、先生から「将来どういう職業に就きたいのか」と聞かれた際に、迷うことなく「サラリーマン」と答えたところ、その先生は非常に怒っていました。

宮田 小宮山さんを身近に見ていた先生にとつては、大きな可能性を秘めているにもかかわらず、将来の夢が「サラリーマン」とは、いささか後ろ向きに感じられたのではないのでしょうか。

小宮山 先生からすると、中学生なのだから、具体的に「こういう仕事に就きたい」という率直な返答を期待していたのに、おもしろくなく感じてしまったのでしょうか。「何を考えているんだ」と詰問されました。

が、全く意に介しませんでした。すかさず、「普通の仕事ができればいいと思っっています」と返したものですから、少しひねくれた中学生だったかもしれません。

宮田 ということは、プロ野球の世界で活躍し、野球のお仕事に携われている現在の姿を、中学生の時点では全く想定していなかったわけですね。

小宮山 今の姿は、当時思い描いていたものから非常にかけ離れていますね。完全にレールを外れてしまっている感じがします。何度も言うように、もつとまっとうな生活をするつもりだったんです。

甲子園の「こ」の字にも届かなかつたレベルの高校時代

宮田 それでも、野球をずっと続けてこられたんですね。

小宮山 中学、高校と野球部に所属していました。全く無名の選手でした。甲子園の「こ」の字にも手が届かないレベルです。しかし、野球は好きでしたから、高校でやるつもりはありませんでした。大学に進学して野球をしたい。それも早稲田大

学の野球部に入りたいと考えました。

宮田 早稲田大学の野球部といえば、全国から優秀な選手が集まってくると思います。スポーツ推薦で入学する選手も多かったでしょう。しかし、小宮山さんはそうした選手とは異なり、一般人試からの挑戦だったそうですね。

小宮山 スポーツ推薦で入れるのだったら、入りたかったですよ（笑）。しかし、スポーツ推薦を受けるほどの力量もなかったのだからありません。そのため、二年間浪人生活を送ることになりました。

宮田 浪人時代は、プレッシャーを感じたり、精神的に追い込まれたりすることもあるたのではないですか。

自由と責任の浪人生活を経て

今の自分をつくった早稲田での四年間へ

小宮山 さすがに、浪人二年目の受験間際は「また落ちたらどうしよう」という不安はありましたが、浪人時代は、基本的に楽しくてしかなかったですね。

勉強しようが何をしようがすべて自由でしょう。最終的には自分で責任をもたない

ればいけません、本人の都合で、すべて行動を決められる点が僕には合っていました。時間に追われることほど世の中で苦しいことはないと考えている僕にとって、時間の制約がない浪人生活は快適なことの上なかつたです。これは経験したことがない人には理解できないでしょうね。ですから、「経済的に余裕があれば、浪人を経験したほうがいいですよ」と、いろいろな機会です。

宮田 そうしてみごと、念願の早稲田大学に合格し、野球部に入部されます。野球部の生活を思い返してみても、どのようなことが印象に残っていますか。

小宮山 当時の体育会は、先輩や指導者の言うことがすべて。白いものでも先輩が黒と言ったら黒という世界です。しかし、早稲田大学で野球をするために進学したわけですから、どんなことがあってもくじけることはありませんでした。

宮田 大学野球の強豪、早稲田大学ですから、毎日の練習も相当きつかったのではないですか。

小宮山 真夏の炎天下でも、かなりハ

ードに練習します。気を失って、その場に倒れそうになることもしばしばでした。もうこれ以上がんばれないという限界の地点にまで追い詰められます。

おかげで、精神的にも身体的にもタフになりました。思い返せば、理不尽なことも多かつたものの、今の自分があるのは、早稲田での四年間があるからだ、確信をもって言うことができます。その意味では感謝の言葉しかありません。でも、「もう一度、あのころに戻りたいですか」と聞かれたら、絶対に断ります（笑）。

宮田 そうしたハードトレーニングと並行して、授業にも出席しなければなりません。練習と学業の両立は大変だったのではないですか。

小宮山 親との約束がありましたから、懸命に取り組みました。親からは「必ず卒業すること。それも四年で卒業するように」と言われていたんです。

ですから、授業と練習が重ならない場合は、努めて授業には出るようにしました。ただし、一年生の時点では、要領を得ていないために思うように単位がとれず、関係

者からも「これでは間違ひなく四年間で卒業できないよ」と、きつたしなめられたこともありまし。

そんなとき、親に一度だけ「入るのに時間がかかったのだから、出るのにも多少時間がかかっていいよね」と弱音を吐いたことがありました。すると、「親をなんだと思ってるんだ」と烈火のごとくしかられました。それから、必死になってがんばりましたよ。

大学入学以来最もうれしかったのは 四年間での卒業が決まったこと

宮田 無事四年で卒業されたのですか。

小宮山 最後の単位の取得は、四年生の二月のこと。すでにプロ野球のキャンプがスタートしていたのですが、休日にレポートを書いて、速達で送って、無事に卒業が決まったときの喜びは言葉になりません。冗談ではなくて、大学に入学以来、最もうれしかったことの一つです。

宮田 スポーツをしながら単位を取得することだけでも大変なことですが、教職課程をとられ、教育実習にも行かれています。

小宮山 これも親との約束です。たまたま受かったのが教育学部だったのですが、せっかくだから学校の教師になるのもいいんじゃないかと勧められ、即座に了解しました。実際、中学・高校の保健体育の教師を目指していたんです。

教育実習は、四年生の六月に行う予定でしたが、大学野球の日本代表に選ばれ、急遽、海外へ遠征に行くことになったため、延期してもらうことになりました。あらためて受け入れ先の母校と調整して、十一月に実習させてもらうことにしたのですが、あとになって、大変なことになりました。

宮田 何があったのでしょうか。

小宮山 十一月は、プロ野球のドラフト会議が行われる時期。自分に興味をもってくれた球団も出てきて、連日、マスコミが教育実習の高校を訪れるようになりました。考えてみれば、プロ入りするはずの選手が高校で教育実習を行っているなんて前代末聞ですから、格好の取材対象になってしまったのです。

さすがにこの時期になると、僕自身も日本代表に選ばれた同学年の選手たちからも

刺激を受け、プロへ行くことを意識していたのですが、受け入れ先の高校は大混乱になるし、とにかくまいりました。

高校の先生から「教師になるつもりがないんだつたら、やめてくれないか」と言われもしましたが、親との約束もありましたから、「何とか実習だけは続けさせてください」と頭を下げたことを覚えています。

宮田 実習生として母校の高校生とも交流をされたのでしょうか。

小宮山 高校生も、「この人はドラフトでプロ野球選手になる人だ」「教師にはなるつもりがないんだな」という思いをもっている。さらに生意気盛りですから、それが態度に出るんですよ。僕のほうもかつて、つい高圧的にしゃかりつけもしました。どなりつけられた側は、今でも覚えているかもしれませんね。今となっては、いい思い出です。先生方にもあまり気遣いできるタイプでもないので、実習期間を通じて、周りからはとてもふてぶてしく見えたりもありません。

宮田 ドラフト会議では一位でロッテに指名され、入団されました。プロ野球に足

小宮山 悟氏



を踏み入れ、現実とのギャップで戸惑われたことはありませんか。

想像と現実とは異なる

突きつけられた現実への対応が重要

小宮山 現実のプロの世界は、想像の世界と異なります。しかし、想像の世界はあくまでも想像の世界と割り切ること。そして、突きつけられた目の前の現実に向き合うことが大切です。僕の場合はこうした考え方ができていたので、戸惑うことはありませんでした。

中には、自分がイメージしていたプロの世界と現実が大きくかけ離れているため、

うまく対応できない選手もいましたが、僕の場合は、小さいころから親に「夢なんて見ているんじゃない」と言われていましたから、最初から浮ついたイメージもない。驚くような事態が起こっても、面食らうことはありませんでした。

宮田 やはりプロは違うなあと思ったことはありましたか。

小宮山 プレーに関することはもちろんですが、それだけではありません。思い返してもすぐかったなと思うのは、当時の監督である金田正一さんの突飛な行動です。

遠征に行く新幹線の車中で、エアコンを切るように車掌に命じて、本当に切らせてしまふ。「こんなに冷えては、選手が風邪をひいてしまふ」というのが金田さんの主張でしたが、車内にはロッテの関係者だけではなく、一般の方も乗車されているのにおかまいなし。あまりに常識外れの行動ですが、僕自身は「これもプロならではの」と割り切ってしまうわけです。

宮田 そうした現実への対応力は、どんな世界においても大切です。一年目から活躍できたのは、落ち着いた考え方ができて

いらしたからだだと思います。

小宮山 一年目は勝手がわからないために、どうすることが一番いいのか、模索しながらのシーズンでしたが、充実感はありませんでしたね。勝ち星にはあまり恵まれなかったものの、周りから十分に評価される程度の成績も上げられましたし、プロで何とかがやっていける自信はつきました。その後の選手生活の基盤を築いたシーズンとなりました。

宮田 その後も、順調に成績を上げられ、現役十三年目の二〇〇二年にはメジャーリーガーとして活躍されます。このときの経緯についてお話しいただけますか。

小宮山 決して特別なことではありませんよ。かねてからメジャーでプレーしたいと考えていたところに、ちょうどフリーエージェント（自由に移籍できる権利）を取得しました。その点では、タイミングが良かったことは事実ですが、現実的な選択をしたというだけのことだと考えています。

さらに、ロッテで指導してもらったボビー・バレンタイン監督の存在も大きかったです。バレンタインが指揮を執るニューヨ

ーク・メッツからのオファーしか受けないと心に決めていましたから。たった一年間だけのプレーでしたが、メジャーリーグで野球をできたことは幸せなことでした。

長く続けられた秘訣は努力に

裏打ちされた自信がもたらす精神力

宮田 それから、一年間のブランクを経て、バレンタイン氏がロッテの監督に復帰すると同時に、小宮山さんもロッテへ再入団。バレンタイン氏が監督を退任する二〇〇九年まで、現役を続けられました。

小宮山 プロの世界ですから、毎年のように新人が入団してくる一方で、そのかわ



宮田 英里さん

りにやめなければいけない選手も出てきます。現役を続けたいけど続けられない。もどかしさを感じながらユニフォームを脱がざるを得ない選手を、毎年のように見てきましたから、自分の意志でやめるのは失礼だとの思いがありました。

実際、年をとつても投げられましたので、それこそ球団から肩をたたかれるまで投げ続けようと思っていたんです。それが四十四歳まで現役を続けた理由です。

ただし、現役最後の年も、球団から現役を続けないかとのオファーがあったのですが、このときばかりは断ることにしました。自分を育ててくれた恩師のバレンタイン監督が退任する以上、ここで身を引くのが正しい姿ではないかと思ったわけです。十分に野球をやり尽くしたという思いがあるの、罰は当たらないでしょう。

宮田 プロの世界では、才能があっても早い段階で現役を退かなければならない選手がいる一方で、小宮山さんのように、長く活躍できる選手もいます。この違いはどこにあるのでしょうか。もしかしたら、プロ野球だけではなく、ほかの世界でも役立つ

秘訣があるのではないかと思います。

小宮山 ひと言で言えば、精神力ですね。結局は、絶対に負けないという強い気持ちや自信があるかないかで、勝負事は決まってくるんですよ。

宮田 小宮山さんは「投げる精密機械」とも称されたように、非常に制球力の高さに定評がありました。一球一球冷静に投げ続けるには精神的な強さが必要ですね。

小宮山 精神力があつてこそ、投球術が生きてきます。現役当時は、登板日には家族も声をかけられないほどの気迫に満ちていたようです。何とかして相手を抑えよう、負けたくないという気持ちが自然と全身からにじみ出るんでしょう。相手がひるんでしまふほどの威圧感をもつことが、プロで活躍するための不可欠な要素だと考えています。

その重要性は、野球の世界だけに限りません。要は、自分に自信をもてるかどうか。自信をもてれば、たいていのことはできますから。もちろん、自信の背景には、日頃からのたゆまぬ努力が必要なこととは言うまでもありません。

プロ野球選手と大学院生の二足のわらじ 日本シリーズ初戦の日だった試験日

宮田 非常に研究熱心なところも、小宮山さんの特徴の一つだと思います。現役選手として活躍される一方で、二〇〇六年から二年間にわたって、母校の早稲田大学院スポーツ科学研究科に在籍されました。

小宮山 専攻したのは投球フォームに関するバイオメカニクスです。研究室のスタッフの助けも借りながら、筋肉の使い方やボールの回転数と球質の重さの関係などについて研究しました。残念ながらその成果を自分のプレーに生かすという段階までには至りませんでした。とても意義ある二年間を過ごすことができました。

プレーをしながらの院生生活でしたので、頻繁に研究室に顔を出せるわけではありません。試合前の時間なども利用して、研究室からのメールをチェックし、レポートを作成したりしました。

そもそも、院生になるための試験も、阪神との日本シリーズの初戦の日。そそくさと試験を受けて、球場に向かったものです。

大学院での経験で何よりも刺激になったのは、研究室のスタッフとのディスカッションです。内容自体も興味深かったのですが、スタッフたちの真剣な姿に接することは、僕にとっては新鮮な驚きでした。将来は学者になろうと、一心に研究を進める若いスタッフたちと向き合って、意見交換したり、共同研究をできた経験は、確実に自分自身のプラスになっています。

宮田 現在、早稲田大学野球部のコーチも担当されていますが、今の野球部の学生さんはいかがですか。

小宮山 僕自身が年をとったということかもしれません。部員の対応一つとっても、われわれが大学生だったころに比べて、少し子どもに見えますね。自分で目的をもって行動する、自立した大人としての姿勢が見えない。どうしても指示待ちの傾向が目についてしまっています。

精神力が弱い部員が多いことにも、もの足りなさを感じてしまっています。われわれの時代には、相手を蹴落としてでもという気持ちで練習にも臨んでいたのですが、その競争心が希薄になっている。その結果とし

て、「仲良しクラブ」に甘んじているように感じることもあります。

協調性があること自体は悪いことではありませんが、相手に向かっていく気迫が足りないことは、アスリートとして決して褒められたものではありません。先ほども申し上げたように、勝負事では、絶対に負けないという気持ちの強さが必要ですから。

宮田 野球部のコーチとして厳しい目をおもちなものも、母校を愛する気持ちが強いからでしょうか。

小宮山 それはありますね。誰もが母校に対しては強い思い入れがあると思いますが、僕も含めて、早稲田大学の卒業生は、特に強い早稲田ナショナルリズムをもっています。

同じ早稲田の野球部出身の先輩後輩という関係だけで、世代の垣根を越えて懐かしさと愛着を感じます。また六大学野球の応援に来ている学生同士も、試合に勝てば「都の西北」を一体になって歌い上げ、連帯感が生まれます。卒業して何十年もたつのに、大学のために何かしたいと、自然に考えてしまうところが、早稲田大学の卒業

生たるゆえんです(笑)。

宮田 確かに、早稲田大学の卒業生は、特に帰属意識が高いように感じます。その中でもチームプレイを重んじる野球部では、より強い愛校心が生まれたと思います。

小宮山 大学時代は、かけがえのない時間でしたし、僕にとつての原点です。社会人として備えなければならぬものを学ばせてもらったし、無名だった野球選手としての才能を開花させてもらいました。

さらに手前味噌ですが、早稲田大学の中でも、野球部は特別な存在です。自分としても、その中で相当な教育を受けたという自負がある。プロ野球の世界に飛び込んでも、メジャーリーガーになっても、早稲田大学の卒業生というプライドはつねにもっていました。

だからこそ、恩返しをしたいという気持ちが強いわけです。野球部のコーチを引き受けたのも、それが大きな理由ですし、早稲田大学から「お前の力が必要だ」と言われれば、ノーという選択肢はありません。これは僕だけでなく、多くの卒業生にとって、普通の感覚だと思います。

気になるのは教員と学生の関係のあり方 教員は教員らしく、学生は学生らしく

宮田 現在の大学教育について、どのように感じられますか。

小宮山 僕が最も気になるのは、教員と学生の関係のあり方です。教員は学生に迎合することなく、自分のスタイルを貫いてほしいし、学生はその先生に合わせるのが本来の姿だと思います。しかし今は、教員が学生に合わせて、自分の考えを修正する場合もあると聞きます。教員は教員らしく、学生は学生らしく。その関係性は大事にしてもらいたいですね。

宮田 今後の目標を聞かせてください。

小宮山 少し奇異に聞こえるかもしれませんが、最終的な目標は「幸せになりたい」ということです。では、どういう状態が、幸せな状態なのか。僕のイメージでは、何もすることがなく、ぼんやりと日々を過ごすような感じですね。その地点にたどり着くためには、もう何もしなくてもいいと思うぐらいに、いろいろなことをし尽くさなければいけません。今は、そのためにもい

ろいろ寄り道をしている最中です。

宮田 その過程で、ロッテで監督を務めている小宮山さんの姿も見てみたいです。

小宮山 僕が知っている監督業は、楽しさなんかひとかけらもありません。勝ったら勝ったで苦しいし、負ければよいに苦しくなる。この年になって、自分から進んで苦しいことをしようという気持ちはありません。ただし、信頼できる人間から、「お前の力が必要だ」と頼まれれば、それを断ることはできません。「わかりました」と答えられるだけの準備はしておかなければいけないという気持ちはありますよ。

宮田 最後に、学生たちにアドバイスのひとつをお願いします。

小宮山 自分の人生ですから、あとで悔やんでみたってしかたがない。自分なりに目標をもって、それを目指して努力してほしいですね。もちろん、失敗することもあってしょう。しかし、失敗を恐れずに前向きに責任をもって行動する。限られた大学生活を充実させてほしいと思います。

宮田 示唆に富む力強いメッセージをいただき、本日はありがとうございます。